「森三郎の作品を読む会」通信　第１号

2012年8月10日　発行
森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

「森三郎の作品を読む会」発足

「森三郎刈谷市民の会」では、実際にもっと森三郎の作品を読んでみたいというメンバーが集まり、「森三郎の作品を読む会」を企画しました。

例　会　毎月第二金曜日　午後一時～三時
場　所　刈谷市中央図書館　二階研修室
内　容　「赤い鳥」掲載の実名、筆名の全作品を読む。

二〇一一年の「森三郎生誕百年」行事以来、「森三郎」の名前は少しずつ市民の間に浸透してきました。

しかし、童話作家「森三郎」の名前と作品が結びつかないという声もあります。そこで、「赤い鳥」に掲載された作品を順に読み進めていこうというのが、まさに名前の通り「森三郎の作品を読む会」です。

専門家の研究会ではないので、気軽に森三郎の作品を読み重ねていくうちに、森三郎の人となり、あるいは彼が拠り所にした「赤い鳥」とその時代について、何か見えてくるのではないかという密かな期待もあります。

平成七年五月、刈谷市教育委員会発行の「森三郎童話選集　かささぎ物語」の作品選定に際して、森三郎の作品をたくさんお読みになった方々も多いかと思いますが、もう一度、いっしょに森三郎作品を読んでみませんか？

「森三郎童話選集　かささぎ物語」や「同　夜長物語」以外の作品も読んでみたいという方、いっしょに森三郎作品を読み広げてみませんか？

森三郎作品をこれから読んでみたいという方もいっしょに森三郎作品の世界を楽しんでみませんか？

2012年7月例会　（7月13日　参加者7名）
森三郎童話紙芝居「かささぎ物語」原作を読む

初出　「赤い鳥」1931（昭和6）年12月号

「かささぎ物語」に見られる素材

①「鶴女房」の　布を織る話

しかし、「鶴の恩返し」のような報恩譚ではない。異類女房譚といっても、実は主人公真壁自身が星の子どもであり、異界の人である。ではなぜ、「かささぎ」が現れたか？

②「星女房」の　星から嫁が来る話

（「森三郎童話選集　かささぎ物語」の酒井晶代さんの解説参照）

「昔話の年輪８０選」（稲田浩二編著・ちくまライブラリー）の中の「星女房」にも、貧しいが、親孝行な息子を助けるために天女が嫁に来るという話が載っている。

決定的な違いは、「かささぎ物語」では二人の間に子が授からないということである。

昔話を素材としているが「かささぎ物語」は森三郎の「再創造」である。

年老いて逝った両親のために墓を建てたいと願い、それがかなった真壁が、今度は子が欲しいと思うのは、いわば命をつなげていくという人間の本能的な願いである。奇しくも、両親が子を授けてと星に願った同じ願いの繰り返しである。しかし、次の世代の子が授かるところまでは星から約束されていなかったということか。そこに悲劇が生まれた。

後半のクライマックスは「鶴女房」の「見るなのタブー」をモチーフにしているが、モチーフの重さに比して、森三郎の表現は淡々としている。

「かささぎ」は自らの意志で最後の機を織る。真壁が貨幣経済にのまれて、欲を出したのではない。真壁は今も帷子を手に旅を続けているのか、星に帰ったのか、余韻が残る。